Random walk for a half century

ランダム・
ウォーク
半世紀

60年前-現在：コピー、あれこれ

名和小太郎

情報管理 54(11), 767-769, doi: 10.1241/johokanri.54.767 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.767>)

1. 口述筆記，タイプライター，そして…

60年前，私は中世の僧院の写学生さながらの姿で大学の教室にいた。教養コースの法学の教師は「はい，ペンを持って」「まる，ペンを置いて」という言葉を繰り返して，学生にその講義を筆記させた。

私は専門コースとして物理を選んだが，ここでも事情は変わらなかった。K先生は，黒板の左上から右下へ，数式を小さな端正な文字でスラスラ書かれ，私たちはそのノートをとることに専念した。ときどき，「アッ，違った」と小声でおっしゃり，黒板上の数式をすべて消し，再び左上から書き直された。

この時代，戦争の影が残っており，これといった教科書はなかった。私たちが手にすることができるものは海外テキストのリプリントであり，そのなかで人気の高かったものといえば，クーラン&ヒルベルトの『数理物理学の方法』があった。

私たちはリプリントという言葉は知っていたが，海賊版，著作権などという概念があることなど，まったく知らなかった。

当時，K大学医学部図書館でアルバイトをしていた友人は面白い話をしてくれた。その図書館はジャーナルを1タイトル当たり2部ずつ購入している，1部は保存用として，もう1部は記事ごとに破いてその論文と同一テーマを研究している教授に配る，と。まだ，コピー機のない時代であった。

私は手っ取り早くコピーを作る手立てはないものかと思案した。速記という方法があることは知ったが，自分にその技量があるとはとても思えなかった。そんな私の目をとらえたものがカナ・タイプライター

だった。私はカナモジカイに入会し，カナ・タイプライターを購入した。

私は，日記や私信はカナモジで通した。メリットはコピーを残せたことである。デメリットは，分かち書きの方法に流派があることであつた。今でも私の手元にはカナモジカイ方式のマツサカ タダノリ著『ワカチガキノ ジビキ』が残っている。これを『ワカチガキ ノ ジビキ』と書く東大方式もあつた。もう一つ，同音異義語のあることも厄介だった。さらに，手紙の宛名書きにあたり，難読地名が少なくないこともあつた。「月寒」，「烏丸」など。

話がさらに逸れるが，カナ・タイプライターという文明の利器のあることを私は小学生のときに知っていた。下村宏という新聞記者上がりの政治家が書いた『これからの日本 これからの世界』（新潮社，日本小国民文庫，1936年）という本に紹介されていたからだ。その本は，人口，衛生，人種改良，食糧，治山治水，エネルギー，交通など，なかには危ないテーマも含んではいたが，ここに「カナ字，ローマ字，エスペラント」という章もあり，ここには明六社の西周による「洋字を以て国語を書するの論」に始まり，山下芳太郎によるカナ・タイプライターのキーボード配列にいたる国字問題が紹介されていた。

この本の著者は敗戦時の内閣情報局総裁であり，A級戦犯の容疑者とされた人であった。だが，この本を見るかぎり，そのような気配を感じることはできない。すべての問題について統計的な数値を示して説いている。面白いのはその横書き表記であり，表紙と扉のそれは右横書き——当時の標準——になっ

ているが、本文中の写真や図表のキャプションは左横書きになっている。著者の時代に対する面従腹背的な姿勢がうかがわれる。

当時、カナモジをビジネスに使っていた企業は伊藤忠だけであった。多くの企業人の意見は、カナモジは読みにくい、タイプライターは打ちにくい、というものであった。タイプライターを打つのはタイプピストという女性専門職であり、くわえて、彼女たちが駆使する和文タイプライターは洗濯板のようなキーボード(?)をもっていた。最低でも1,000種の文字は打てた。

私のカナモジ熱は1980年代にワープロが現れるとともに消えた。あれこれと試行錯誤の末、私は富士通のオアシスに転向した。決め手はかな漢字変換にあった。記録媒体としては5インチのフロッピー・ディスクを使っていたかと思う。この時期以降、私は自分の著書の入稿をフロッピーでするようになったが、いくつかの出版社からは最初の経験だったといわれた。私はこのとき原稿用紙が稀少品になると予測し、その収集を始めた。

オアシスだが、それも2000年代になると消えてしまった。だが私はウィンドウズの上でオアシスをエミュレートして使い続けた。ワードでなければ投稿を受け付けられないなどという学会も出現し、当初、私はそのような学会には投稿を拒んだ。だが、ついに根負けして、今日ではワードに移行している。

ということで、現在の私の指には、カナタイプ配列、オアシスの親指シフト配列、PCのQWERTY配列が混じり合って記憶されており、その指はときにとんでもない動きをしたりする。

もう一つ、膨大なオアシス用ファイルが手元に残っており、そのすべてをマイグレーションする気力も時間もない。仕方なしに、私は古いハードウェア、古いソフトウェア、古いマニュアルをそのまま残している。鬱陶しいかぎりだ。

21世紀初頭の今、だれもがかな漢字変換あるいは

ローマ字漢字変換を当たり前駆使している。

2. 謄写版、PPC、そして…

小学生時代の記憶をもう一つ。すでにコピー機として謄写版、いわゆるガリ版があった。先生が教材やテスト用紙を作るときに使っていた。余談になるが、その謄写版は1880年代にトマス・エジソンのアイデアを同世代人がエジソン式謄写版 (Edison Mimeograph) として商品化したのが起源らしい。それにしても“Mimeograph”とは絶妙の命名である。

その謄写版のメリットは使い勝手のよいこと、ランニング・コストの安いことにあった。この道具は1970年代末まで、学会でも研究発表会などの配布資料用に使われていた。ライフ・サイクルは意外に永かった。

1950年代半ば、私はS石油に就職した。ここでは青焼きと称する——ジアゾ式ともいった——コピー装置があった。探鉱用の計算図表とか、その結果を示す地層断面図など、この機器を使ってコピーした。

アンモニアの臭いがしたり、感光紙を使う必要があったり、コピーが褪色したり、冊子体のコピーはできなかつたり、今にして思えば不便な点は少なかつたが、1事業所に1台といった見当で、けっこう普及していた。

1960年代後半、私はA化学の研究所にいたが、ここでPPC複写機 (plain paper copier) に会う。この“plain paper”がみそで、このためにだれでも気軽にコピーできるようになった。ちょうど、ゼロックスの基本特許が切れたということも普及を推し進めたようだ。このあと、マクルーハン流に言えば、万人が読者から出版社へと立場を変えることになる。

じつは万人が出版社というのは言い過ぎで、実態は万人が写学生になったと言うべきであった。研究者は、いまや自由にジャーナルを複写できるようになった。図書館も同じジャーナルを2部購読する必要はなくなったはずだ。

このために当時の大手ジャーナル出版社のウィリ

アム・ウィルキンス社は購読者の減ることをおそれ、大ユーザーである国立衛生研究所と国立医学図書館に対して著作権侵害の訴訟を起こした。1973年、米国での話である。

この訴訟は控訴審では4対3の評決で侵害なし、最高裁では8対8の同数で判定なし、ということになった。まだ、米国でも旧著作権法の時代であった。このあと、米国は著作権法を大幅に改正し、併せてコピーライト・クリアランス・センター（CCC）を発足させた。CCCはジャーナルなどのコピーにともなう著作権管理を実施する組織である。

当然ながら、日本でも同様の課題が生じた。日本の新著作権法は1970年にできたが、日本版CCCとして日本複写権センター（JRRCC）ができたのは1991年になってからであった。

1990年代半ば、突如、学術著作権協会（JAACC）から手伝えという話が飛びこんできた。JAACCはJRRCCのメンバー団体であった。なぜ私にこんな話が飛びこんできたかといえば、私が「鳥なき里の蝙蝠^{こうもり}」だったから。当時、理系の人間で著作権審議会のメンバーだったのは私だけであった。

私自身、学術情報は研究者が共有するクラブ財と理解していたので、その旨を申し上げ、いったんはその役目を断った。だが、話はそれですまなかった。当時、JAACCの理事は、理工系と医学系の大ボス諸氏であり、著作権に詳しい人はいなかった。私は企

業から大学に移籍したばかりの駆け出しの研究者であり、大ボス諸氏の意に逆らうことができなかった。

私とて著作権管理の実務に精通していたわけではなかった。そこで、この業務について先輩格のN協会を訪ね、厚かましくも、その情報システムのフロー・チャートを見せてほしいと頼んだ。担当者は快く応じてくれた。私はそのシステムがどんなモジュールから組み立てられているのか、どのモジュールが重要なのか、それを知ることができた。

だが、私はここで学んだノウハウを役に立てることはできなかった。N協会のビジネス・モデルとJRRCCのそれとが、あまりにも乖離していたためであった。N協会の扱う著作物はすでに電子化されていた。だが、JRRCCそしてJAACCのそれはまだ紙に固定された印刷物にすぎなかった。

気がつくとも私たちは巨大なコピー装置のなかにいた。それはインターネットという装置であった。ここには、FTP、Archie、gopher、WWWなどという道具が仕込まれていた。これにナブスター、ウィニー、さらにグーグル・ブック・サーチと加わった。どれもコピーを簡単にできる仕掛けであった。

「何者かが何かを持ち込み、何者かが何かを持ち出す」。これは1994年、米国で起きたインターネット関連訴訟で使われた言葉であった。それが今日、日常的になった。

参考資料

- a) 梅棹忠夫. 日本語と事務革命. くもん出版, 1988, 245p.
- b) 名和小太郎. サイバースペースの著作権. 中央公論社, 1996, 194p.
- c) 名和小太郎. 学術情報と知的所有権. 東京大学出版会, 2002, 400p.
- d) 名和小太郎. デジタル著作権. みすず書房, 2004, 296p.
- e) 名和小太郎. 著作権2.0. NTT出版, 2010, 258p.
- f) 長尾真, 遠藤薫, 吉見俊哉編. 書物と映像の未来. 岩波書店, 2010, 204p.